

— NHK「総理にきく」—
選択のとき(抄)

内閣総理大臣 大平 正芳

作 家 督野 綾子

NHK解説委員長 家城 啓一郎

(昭和五十四年七月三十日)

家城 総理大臣に夏休みがおありになるのかならないのか、たぶんないと思うのですけれども、この八月の暑い中、どんなふうにお過ごしになりますか。

大平 八月は前後一週間ぐらい休ませてもらおうと思っておりますがね。軽井沢か、箱根か、どちらかにまわります。

家城 新聞に総理の一日の動向が出ますけれども、ほんとうにたくさんの人に会われるんですね、会議はあるし。

大平 あすこに書いてあるほどのことはないですね。その間、若干の合間がございますのでね。しょっちゅう秒おかずに人に次から次へと会っているわけでもございませんね。

曾野 総理はどうお過ごしかなんて、非常に素人っぽい興味なんですけれども、一週間とおっしゃいましたか、そのあとはもう全部決まっていますしやるんですか。

大平 だいたい。

曾野 まあたいへん。毎年そうであらうしやいますか。

大平 そうですね。毎年大体そうですね。一カ月ないし一カ月半先きくらいまで大体決まっていますね、それがだんだん埋まっていくわけですね。

家城 充電するようになりますと、やはり今度の一週間の夏休みというのは貴重な時間でございますね。

大平 そんな野心を持っていませんからね。

曾野 お短か過ぎますね。

大平 そうかも知れませんが、そのぐらいしか取れませんね。

家城 せんだって、日本人は働き過ぎだ、働き中毒というようなことはありましてね、その働き過ぎ論に対する反省が過剰なぐらい出てきて、「じゃ休めというのか」というそういう議論がある。いま、日本人はそんな休むほどのレベルにまで全体が達しているのか、働き過ぎ論、反働き過ぎ論、総理はどうお考えですか。

大平 私は、先進諸国と日本と比べた場合と、昔の日本といまの日本と比較の仕方があると思うんですね。昔の日本といまの日本と比べた場合にはもう非常に変わります、そんなに無理した働きはしてありませんね。昼夜をわかつた非常な重労働に耐えるなんていう事例はあんまりなくなりましたね。

曾野 総理の場合たいへんでもいらっしやいますしやうけれども、お楽しみであらうしやいますしやう。私、たいへん同情がないんですけれども、人間いやなこと働くのはかわいそうでございますけれども、楽しいことでしたら同情する必要ない……。

大平 同情する必要はないですね。私なんかには同情していただくと思わんですけれども、いまの一般に日本人は働き過ぎるじゃないかということに対して、いま、昔に比べたらそんなに働いていないじゃないかと、ただヨーロッパの諸国なんかに比べては、比較的働いておるほうかも知れませんね。そういう感じはしますけれどもね。

家城 ぜんだつてサミットが終わりましてからNHKで世論調査をいたしましたら、「エネルギーの将来について不安だ」ところお答えになった方が九二パーセント、それから「長期にわたつて影響を及ぼすであろう」と七〇パーセントが心配しておられるんです。このエネルギーの将来について、なかなかわからない要因がまだ多うございますけれども、総理のご展望はいかがでいらつしやいますか。

大平 私はね、樂觀もしなければ悲觀もせんです。昔、まあわれわれが石油にこんなに頼らなくても産業も経営してきたし、生活もやってきたしね。だけでも石油のほつが便利で安くて能率がいいもんですから、石油に頼ることになつてしまいましたが、気がついてみると、石油にたつぶりつかつてしまつていゝる。輸送業、工業ばかりでなく、漁業から農業にいたるまで、みなもついまは石油を外しては考えられない。われわれの生活自体がそういうふうになつておりますわね。

「これはえらいことになつた」と思いますが、しかし、これを全部早く切り替えていく言うてもなかなかむずかしいございますけれども、ただ、これを切り替える道はないわけでもないし、できない相談でもないと思つたんですね。その努力をしていけば、非常に展望は暗いと言われますけれども、克服できない相談ではないと。しかし、それには相当苦勞がいろいろありますね。

ただ楽観するわけではないのだが、しかし、悲観する必要はないんじゃないか。手堅く、いま、石油が高くなる、あるいは入手が困難になればそれに代わる道を考える。まず節約する。代替エネルギー、たいへんむずかしいことですけれども、それを開発利用していくということを丹念にやっていって、そのできる範囲内において、われわれの産業の経営なり、生活のやり方を工夫していくというように、日本人は、そういうような点は、相当、どこの国にも負けないように、やれるだけの能力を持っていると思いますけれどね。

曾野 私、たいへんいつも態度が悪いんでございますけどね、見通しというのは、学者の先生方とか、政治家の方々とかいろいろとその道の大家がお集まりになってお考えになるんでございますけれども、正直言って当たったためしがないのですね。それですからね、あまり信じなくてもいい気がするんです。そういう見方はまちがいなんでございませうか。

大平 それは当たったらいへんですよ。

曾野 ああ、そうでございますが、それで安心いたしました。

大平 見通しのように、そのとおりに世の中が動くということになったら私はたいへんだと思うんです。世の中はそのとおりにいかないからおもしろいんで、ただその見通しが立てられると、それを一つの判断の目安にしまして、各経済主体が個人もあるいは企業も国も、まあいろいろ工夫するわけですね。ですから、見通しから必ずはずれますけれども、その見通しを立てておるといことがむだだとは言えない。

曾野 よき刺激でございますね。

大平 そういう意味において、その限度においてわれわれはやっているわけだ。

曾野 いま、総理がおっしゃいましたけれども、どこの国にも負けないように代替エネルギーの問題でもやっていると、私、日本人はやってのけるような気が確かにするんでございますね。そうしますと、よいなことかも知れませんが、いわゆる先進国は、それでこの危機を乗り切ってしまうして、非先進国との間に大きな段差が将来つくんじゃないかという気がいたしますけれども、そういうことはお考えになりませんか。

大平 つまり、今までもこういう状態でありながら、だんだんと落差がついてきましたね。ますますついていきましょね。

曾野 そつでございませぬ。

大平 しかし、ついていきますけれども、極端に言いますと、インドの昔ふうに生きておられる方々が幸せなのか、それから、もっと非常に進んだ便利な西ヨーロッパとかアメリカの国民が幸せなのかということと、ちよつとまたこれ考えなければならんことになってくるので、私は、落差がつくということではできるだけ避けるように努力しなければならんけれども、それがあつたら、もう世界は、破滅だと考える必要はないんで、われわれはやるべきことをやると、発展途上国の方々もやるべきことをやるということで、それぞれユニークな行き方があるんじゃないんでしょか。

曾野 そつでございませぬ。発展途上国の方々の行き方からわれわれの多くの精神的なものを学ぶということができまして、己が鏡のようところがございませぬ。でも、いま伺っておりますと、総理は

たいへんいい意味で分裂したお考えをお持ちのようでございますけれども、これは、私違つかも知れませんが、ごめんなさいませ。私、その分裂した方ってたいへん好きなんですございますけれども。

大平 分裂。

曾野 ええ。両極のお考えが同時におありになる。そういたしますと、政治をなさいましておつらくございませんですか。変な質問になっちゃって申しわけないんですが。

大平 一方に思い込んで、一方に片寄ってしまうと苦しいけれども、まあ、こういう、政治というのは、いろんな考え方を、なんと言いますが、調節をしながら、何か非常に立派なものでないかも知れんけれども、まあいまの分別はこういうことじゃないだろうか、ハイカラなことはで言つとコンセンサス、こういうことじゃないだろうかというよつなことを作りながら、いかだを流すようにもっていくわけで、一直線になんかうまくやろうとしても無理ですね。

曾野 当然、危険でございますね。ただ私も庶民というのは、たいへんセンチメンタルでございますよ。う？ ですから、道徳的なことをパツと総理がおっしゃって下さると非常にうれしい。「だけでも世の中というのは悪の面もいたらぬ面もあるんだよ」なんておっしゃると、「もう少ししっかりせい」なんて、そういうことを必ず言つと思つてございますね。そういうものについても覚悟の上で。

大平 毎日、言われているんですよ。

家城 いま、たまたま分裂ということばが出ましたけれども、いまのエネルギーに關しましてね、いまの生活水準、あるいは生活の快適さ、それを犠牲にしても節約に努力しましょう、とこういう考え方が一つ

ある。逆に、環境がいくら汚れても、石炭をたくことによって、あるいは原子力発電の不安があっても、自分はやっぱり生活水準を保ちたい、生活の快適さそれを維持していきたい、二つ考え方があると思うのですよ。

世論調査いたしますと、節約に努力というほうが多いですね、半分ぐらいで現在の生活を維持していきたい、少々空気が汚れても原子力の不安があってもと、こうあるんですね。そういうような選択に一国の総理として非常にむずかしいだろうと思うんですけども、どんなふうにお考えになりますか。

大平 それはどつちもまちがいでして、いま、われわれが、あるがままの生活ですね、こういう生活水準を維持できている、こういう働き口を持つておる、収入の道をこれだけ確保できているという経済の全体の仕組みの中で、われわれ生きていくわけですから、この経済の仕組みを根本的にやり直そうというこれは革命ですけれども、そんなことは誰も望んでいない。

しかし、これを支えておるエネルギーというものが細つてきたんだから、これはもう思い切つて消費も切つてしまふ、生産も切る、雇用も落とすということになると、これはたいへんな激変を世の中に与えることで、私は、政治はそういうことをやっちやいかんと思えますね。

いまの状態を何とか、エネルギーが足らなくなつたらそれをどうして補うかを考えて、いまの状態をできるだけ変えないように、できたらよくしたいんだけども、よくできないにしても、悪くしないようにわれわれは一所懸命にやるべきだと思いますね。それでいて、できないものがあれば、それはもう理解してもらわなければいかんと思えますけれども、そんなに思い込む必要はないんじゃないでしょうか。

日本人は、そういう時に、そういう変化に対しまして比較的よく私は適応してきたと思えますね。これは偉いと思えますね。諸外国は、先般サミットで大勢の方がこられましたけれども、「すばらしい」と言うてほめられましたね、ちょっとくすぐったい感じがしましたけれども、「こんなにほめられました、このような評価を受けました」なんて言うのと、また手柄になっちゃいかんと思つて私も黙っているけどね。

家城 政治家のタイプで、これはウォルター・リップマンという人が言っておりますけれども、ポリティシャンとステーツマンの違い、ポリティシャン、政治家というのは煽動すると、ステーツマン、政治家はこれは現実をもつて国民を教育すると、「あなた方は政治家を選ぶのか政治家を選ぶのか」とこう言うのですね。いま、曾野さんおっしゃったのは、まさにいまだどういふ状況かということ、ちゃんと説明するということが政治家の責任ではないか、そういうことをおっしゃったのですね。

大平 そうだと思えますね。私は、もう一つ言い添えると、リップマン氏の考え方に対して、ステーツマンを必要とするかポリティシャンでもがまんでできるか、それは、やっぱりその国情でございまして、いま非常に偉大なリーダー、偉大なステーツマンシップを必要とする、一方において、それがないとその国は持たないというような状態かどうかですね。

政治家ばかりを責める人もいけないんで、やっぱり国民の状態で、国民の期待にこたえた政治が行われなければいけないとすれば、その国の事情によってステーツマンを必要とする時はステーツマンシップを發揮せよならんだらうし、私もよく言っているんですが、日本のような場合はね、あんまりリーダーシ

ツブなんてものはみんないやがりますよ。昔からそうでしょう、日本にリーダーなんか出たことないんです。だいたい国民のほうが非常に積極的で意欲的で行動的だから、それをできるだけうまく調節しながら全体としてひどいことにならないように、できたら全体の歩みがおかしくならんようにしていく、そういうことがいまの政治の最小限度の任務だろうと。

しかし、それにしても、いまおっしゃるように、いまの現実がどういう状態であるかということに対しては、明確にお話して、理解を求めることはいいと思いますが、それは必ずしも十分できておりませんね。できておりませんのは、全体のピクチャーを初めからこつちゃんと呼ぶと順序よく問題にしてくれるといいんですけれどもね。「こつはどつだ」とおっしゃるし、「こつはどつだ」と聞かれるものだから、「こつはこつでございます」「なんて説明しておいたら、全体として非常におかしなことになりましてね。

例えば、「増税論を大平さん言っている、これはけしからん」という。私は増税論をいきなり言うんじゃないくて、財政はこのままではいけないんで、財政は再建せにやいかんと思っておりますと、そのためには歳出も削らにやいかんし、人員も削減せにやいかんし、しかし、同時に、いまの税制でできるだけ充実した課税を行って、なお足らなければまあ増税のほうもいっぺん検討して下さいと言っておるんだけれども、それを税の問題だけに限るとね、こつという前提を抜きにしまして、「これはけしからん」とお叱りを受けるんですが、ただ、冷静に政府の言っていることを、全体を公正に見ていただく、判断していただく、そこでまだここに力点の置き方が足りない、努力が足りないというように指摘していただくといいいん

だけでも。

家城 それは、増税というのはまさにおっしゃられましたように、安上りで効率的な政府、チーフガバメント、そちらの努力を国民がある程度納得しないと増税のほうも「うん」とは言いませんでね。

大平 だから、それをまず行き着くところまで苦しいけれどやらなきゃならんわけです。それが予算の編成というやつで、それをやって、なおこれを引き続いてやりますか、それでこれだけの財源が要りますかどうしますかという相談をしますから、その場合に、われわれとしては決断して、「こういうことですら、こうしたい」というように国民の理解判断を求めるようにしたいと思っています。

曾野 それが少しお足りにならないかも知れませんが、税の問題。私、時々ぶつかるとございますけれど、「日本は非常に税金の高い国だ」とか、そういうふうにおっしゃる方があるんです。もつと現実的に見れば、先進国の中で非常に高額所得者から取る率は高く、それから免税点の高い国であるということだね、はっきり、おっしゃるべきです。

大平 ええ、下のほうに安くなっておりますからね。そういうふうになっているわけですから、だからもう少しこの辺り工夫を考えてみてくれんかということの問題にはなると思っていますよ。

家城 ただ、これまでやはり国の財政が四割方借金でやってきているというのは不健全ですね。これを総理はなんとかして再建を、とこうおっしゃるわけですね。

大平 これは、まあ石油問題に関連して、石油の値段が四倍にもなってきた、それだからそれで世の中はたいへん不景気になってきた、歳入が減ってきた、その場合に歳出も減らして、全体として、つつましく

やつていくということを選択すれば、それで一つの財政がこんな状態にはならなかったと思うのですけれどもね。

家城 そう思いますね。

大平 しかし、あの当時、私はちょうど大蔵大臣をしておりましたけれども、私の選択は、この石油ショックの重荷を一つ財政のほうで負担していること、「それで企業も国民も従来どおりやっておつて下さい。いまここに嵐が吹いているのだから、この嵐の間、私のほうで財政でこの嵐は吹き止めておくから、あなた方は従来どおりやっておつて下さい。それで時間をかけてこの財政の負担、つまり国債の増発という問題は片づけましょう」という選択をしたのです。その選択は、私は誤っていないかと思つたのですよ。

諸外国も「すばらしい選択だった」と言ってくれるのだけれども、しかし、重荷はここまで残つたのですね。だからこれをどうしても背負い切れないとほめられないわけですね。それをいまから残された半分の仕事をやるうというわけですからね。だから、いままでのやつたことに対する罪障を払おうというわけですからね。

家城 切り詰めて再建するということが、それで、このままでもつて増税でやっていく。大平 まず切り詰めなければいけませんね。みんな「そんなに言われるけれども、われわれは勤弁して下さいと言つけれども、ここまでは切り詰めて下さいよ」と、ある程度の協力は得られると思つて下さいよ。

しかし、それではね、とても単位が違うのですよ、財源の不足はね。それは何千億という金は出てくるかも知れんけれども、何兆円という金は出てこないのですよ。それほど大きな課題をいまわれわれは持つ

ておるといふわけですから、そこで若干増税のほうの負担を増すことをこの際考えてくれないか、インフレーションを避けるために、われわれの生活を守るために、そうしてくれないかというのが、いまの問題なんです。家城 一般消費税でいくのか、あるいは所得税、法人税の増収でいくのかですが、増税でいくのか、ここいらは、結局、こつちがだめならこつちというふうなのびきならない。

大平 こつちがだめならこつち 歳出の削減のほうでみんな片づけば、それでそんな必要はないのですけれどもね。そうでなければこちらでいきましようか、こちらでいきましようか、両方とも嫌いだしたら少しずつ両方やりませんか、いろいろなことを考えたらいいのじゃないでしょうか、あんまり固く考えないで。

曾野 どの家も完全に幸せてはないのでございますね。だから、せめて国家は完全であつてもらいたい、社会も理想的であつてもらいたい、そういうような気持ちがあるような気がいたしますね。完全を求めるというのは、私なんか想像できないことなんですけれども、けつこつそういう風潮があるような気がいたします。ですから、どこも同じで、家庭も国家も同じなんで不備だらけと言つてしまったほうが簡単でございますね。

大平 そつち言つと、「それは理想が足りない」、「熱意が足りない」とおっしゃるけれども。

曾野 でも現実はそのものでございませう。

大平 だから、一所懸命にやつても、なかなか良い点数は取れませんよ。

曾野 それは、どここの家庭もそうだと思いますね。

大平 それが政治だと思えますね。

曾野 私ひとつ、お話が飛ぶかも知れませんが、難民問題をお伺いしたい。これは、お金と政治だけではなく、一つの哲学の問題が入って、その時に、総理としてのお立場と個人のお立場とが分裂していらっしゃるのじゃないかと、それを一度うかがいたいと思っておりますので、すけれども。

大平 いま、インドシナ難民というのはだいたい八十五万人ぐらい流出したでしょうか。そのうち五十万人ぐらいがまだいき場所が決まらずに収容キャンプで暮らしているという状態で、三十五、六万人がまあ落ち着く場所が決まりましたね、アメリカがそのうちの十六、七万、フランスが七、八万というように引き受けてくれておりますが、日本はほとんどないんですが。この状況を見ておりますとね、やっぱり自分の身寄りというが、身内、相談相手がある国にいつていますね。

それからもう一つは、その社会が受け入れる社会と、入れない社会がありますね。日本の場合は、日本にいつても誰も身寄りが無いということ、まず希望者が無いのです。それから日本の社会というのは、お互いは平気であるかも知らんけれども、目に見えない壁がありますね、外国の方々というのがなかなか入れない社会なんです。それを外国の方もよく知っていますよ。

それで、結局、私は、日本はいろいろ受け入れの枠をふやしてみても、いくら努力してみても、そんなに日本にこられる人は少ないと思います。したがって、日本としては思い切って財政援助をしてあげるということで、これにこたえないといけないのじゃないか。そして、そういうことでアメリカはじめ、諸外国は納得していますね。「日本は、そういうことでやってくれませんか」と、「実際に定住枠を拡大せいで

言ってもあなたの国は無理ですな」ということは、だんだんわかってきましたね。しかしながら、定住枠の拡大もわれわれはやりませよ、努力しますけれども、非常に限られた人数しかできませんね。

曾野 その背後に、せっかく日本人は単一民族でやってきた所にそういう複合的な状況になると、これはセンチメンタリズムを離れて、「助けてあげたい」という気持ちとは別に、将来問題が起きるといふふうな総理のお考えはおありになりませんか。その心配はございますね、それも当然、考えられることだと思いますが。

大平 それは、日本人、私ばかりじゃなく、日本人が全体としてやはりこういう単一民族、単一言語で暮らしていくということ、あまり乱されたくないという気持ち、わかりますよ。わかりますけれども、こんなに地球が狭くなりましてね、相互依存がこんなに高まってきた時に、こんな態度でいいのかということ、確かに、日本も考えなければいかんと思うのですが、いま、とても難民ひとつ取ってみても、三百人、五百人はなかなかできないのですからね、観念論としてそう考えても実際は動かないのですよ。非常にユニークな国ですね。

曾野 そつでございませぬ。

大平 だけれど、こういう国柄だというのはしょうがないので、諸国民が日本に定住されて、しかも、チヤンと暮らしていけるといふデモクラチックな国であってほしいと思えますけれどもね。何かまだとても距離がありますね。だから、じつくり時間をかけて日本の経済ばかりでなく、日本の生活自体の国際化と、これは考えて行かないと。

家城 いま、国際化というようなことが出ましたけれども、日本はこれからますますそういうふうでなくてはならないだろうと思えますけれども、総理、わが孫や子孫にどういうような社会を残していったりしたいかというふうにお考えになりますか、非常に抽象的ですけども。

大平 国際化という意味は、日本人が、足が長くなってみたり、外国語が上手になってみたり、非常にスマートな国際人になれるという意味ではないのです。そんなことになりませんよ。そんなことにはなれないのだけれども、足は短いままでけっこうだし、色は浅黒くてけっこうですが、やっぱり日本人というのは、尊敬できる、評価できる人種である、日本人というのはやることをチャンとやっておる、日本が世界にあることが非常にありがたいことだと思つうような国になれば、ほんとうの日本の国際化じゃないかと思つんですよ。

そういう方向はできないことはないんで、それは現に、われわれは相当そういう方向へだんだん前進していつていますからね。それで、相当ある面においては、非常に評価を受けるような国になりましたが、ある面においてはまだまだという状態でございますけれども、まだ努力によりまして、相当世界の尊敬と評価をかち得ることはできうるのじゃないでしょうか。そういう日本になりたいということですね。

日本が一億一千万の国民、これが一億三千万になるか四千万になるかもしれませんけれども、ここで非常に楽しいパラダイスを築こうなんというのじゃなくて、そんなことはできっこないんで、やっぱり世界の領海の中で、世界の地縁の中でわれわれは生きるわけですから、だから日本はチャンとそれだけの責任を心得ておる、役割を心得ておる、それだけの貢献をしておるといふ国民であつてはじめて生存も可能な

んだし、そういう国民にはなれないはずはないんじゃないか。

曾野 日本というのは、二番手に何かをやる時には、たいへんスマートに常識のあるようにやるんではないですか。しかし、リーダーシップをとって人道的に日本が最初にこれをやるべきだとおっしゃったことが一度もないような気がします。そういうのは私の不勉強のせいでしょうか。

大平 いま、ここに国際会議場があるとすれば、国際会議でここに屏風を立ててあって、そして、そこにツカツカといってまず席を占めて周囲を見渡して、「おれはどういう順序で発言してやるのか」というように考える前に、そのつい立ての後のほうからまず様子をよく見ておいてね、(笑い)どうだろうか、いま、みんな座っているが、おれもそろそろ出ていってよかろうかとか、なんかまだおずおずしておるような感じがするんですよ。また国際社会に、なんとというか、なんとなくアウトサイダーである感じから抜け切れないわけで、しかし、急に日本人がまたバカに出しゃばっていくのを、必ずしも私はいいとは思わなくても、そういう状態から一歩でて、チャンとごく自然に座れる、そして自然に違和感もなくやっていけるといふようにだんだんなってきましたよ。なりつつある。

家城 総理、いろいろお話をおうかがいして、やっぱりこの一九八〇年代にいよいよ臨むに当たって、この時代をどういふふうに捉えられるか、特に石油の問題、エネルギーの問題が絡んでいかがでございますかね。総理のご認識。

大平 だから、一九六〇年代、たいへん繁栄の時代でございましたし、七〇年代は一応反省というか、踏みとどまっているいろいろな問題が出てきた時代でございます。八〇年代というのは、きっと時代の精神が

変わりたいき方を取るのじゃないでしょうか。まあ、量的拡大より質的充実というようなハイカラなことばを使っている人がありますけれども、そんな感じね。目に見えないもの、精神とか健康とか明るさとか清潔さとか、そういうこと、物質的な繁栄は目に見えるけれども、それも大事だけれども、大事かも知れませんが、もっと大事な目に見えないものがあるんじゃないかならうかとか。

それから、戦争、平和の問題につきましても、武力を強くすることはかりが能じゃない。やっぱりわれわれは平和に貢献すべき道がほかにもつとあるのじゃないかと、ほんとうに文化的にいろいろ深く考えなければならぬ時代がきたのじゃないかと。いろいろ問題で、経済的な繁栄なんかをこれ以上むやみに追求できないかも知れませんが、もっとそれでいながら幸せな充実感を求める道がないはずがないのじゃないか、そういうようなことをお互いに国の内外を通じて探究していくべき時代じゃないだろうか、そんな感じがしますね。

家城 どうもありがとうございました。